

診療看護師と看護師が連携・協働すること の効果と看護部門としての支援

福田 淑江[†]

第66回国立病院総合医学会
(平成24年11月17日 於神戸)

IRYO Vol. 68 No. 7 (341-345) 2014

要 旨

当災害医療センターは平成24年5月23日に看護師特定行為・業務試行事業が承認された。看護部門としての支援は、①業務試行事業について病院職員へ周知する、②統括診療部長・指導医と情報共有しながら、診療看護師 (Japanese nurse practitioner: JNP) が活動できる環境を整備する、③ JNP の実際の活動支援、④ JNP と看護師が連携・協働することの効果を客観的に評価し、その結果を情報発信する、の4項目である。

JNP と看護師が連携・協働することの効果について、業務試行事業を実施している3病院の看護師対象に質問紙調査を実施した。ベナーの看護実践 (→346p を参照) 7 領域31項目¹⁾について、5段階の評定法および自由回答法で評価した。280名の看護師から回答を得た。プラスの効果があったと評価されたのは、「診断機能とモニタリング機能」「急速に変化する状況における効果的な管理」「質の高いヘルスケア実践をモニターし保証する」の3領域であった。次に自由回答法では、JNP と看護師の関わりについて多くの記載があり、共通するものに分類すると、「タイムリーな対応」「情報共有」「患者への説明」「協働してのケア」「相談」「指導・教育」と「その他」に分類できた。

調査結果から、JNP と看護師が連携・協働することの効果としては、以下の4点が考えられる。① JNP が医師の包括的指示のもとで活動することにより、急変時対応を含めタイムリーな患者対応ができる。② JNP と看護師は積極的に情報共有し、病状変化に応じてタイムリーに情報を得て、観察、病状変化の予測、看護問題の検討に活かせる。③患者の病状変化に応じて JNP が仲介となり、看護師はタイムリーに医師からの応答が得られる。④ JNP は診療と看護の両方の視点を持つスペシャリストとして相談・教育の役割を担い、それは看護師の育成につながる。

キーワード 診療看護師, 看護師, 連携, 協働

はじめに

当災害医療センターは平成24年2月末に看護師特

定行為・業務試行事業の申請をし、5月23日に承認された。診療看護師 (Japanese nurse practitioner: JNP) の配置は、医師の包括的指示に基づく業務に

国立病院機構災害医療センター 看護部 [†]看護師 (現所属 東京医療保健大学 国立病院機構キャンパス)
(平成25年3月4日受付, 平成25年10月11日受理)

Quality Improvement in the Clinical Practice by Collaborating Japanese Nurse Practitioners with Nurses and the Significance of the Nurse Department Support

Yoshie Fukuda, NHO Disaster Medical Center (Tokyo Healthcare University)

(Received Mar. 4, 2013, Accepted Oct. 11, 2013)

Key Words: Japanese nurse practitioner, nurse, cooperation, collaboration

専念することから統括診療部長の下に置かれ、1年間は指導医のもとで3-4カ月ごとにローテーションしながらの研修となった。看護部門は組織目標の達成に向け、創造的に看護サービスの質を高めることのできる人材の育成と活用が求められる。今回の業務試行事業に関して、看護部門が支援したこと、将来JNPの活躍が医療・看護にどのような変化をもたらすのか、業務試行事業実施施設の看護師を対象に調査したのでその結果を含め以下に述べる。

看護部門として支援したこと

- 1) 業務試行事業について病院職員に周知するために、業務試行事業前に全職員対象の研修会を開き、①クリティカル領域におけるJNPの養成教育、②看護師特定行為の内容、③JNPとして目指すことについて伝えた。また、院内・看護部内の会議・委員会で伝達し、積極的に情報を提供した。
- 2) 統括診療部長・指導医と情報共有を図りながら、JNPが活動できる環境を整備するため、院内に業務試行事業ワーキンググループを編成し、毎月会議を開催、実施上の課題・問題、プロトコル等を検討し、その結果を医療安全管理委員会に報告した。10月には業務試行事業の中間報告書を提出した。
- 3) 医療安全を最優先に、JNPとしての実際の活動を支援するため、看護師長と連携し、研修の状況、看護師の反応、患者・家族の反応、医療安全管理に関することなど情報の共有を図った。また、健康管理、精神的支援に努めた。
- 4) JNPと看護師との連携・協働の効果を客観的に評価し、今後の医療・看護の質向上にどのようにJNPを活用すべきか情報発信した(具体的内容は次に述べる)。

JNPと看護師が連携・協働することの効果に関する調査

【調査目的】JNPと看護師が連携・協働することで、看護師としての自身の看護ケアにどのような影響があったかを調査し、今後の国立病院機構の医療・看護にどのように貢献できるかの示唆を得る。

【調査内容】パトリシア・ベナーが示す看護実践7領域31項目¹⁾(表1)について、5段階(0:プラ

スの影響はなかった 1:少しプラスになった 2:プラスになった 3:とてもプラスになった 4:非常にプラスになった)の評定法と自由回答法により評価した。

【調査期間】平成24年9月1日~10月10日

【調査対象】JNPが所属する急性期医療を担う国立病院機構病院の3病院で、JNPが研修をした部署(外科系病棟・内科系病棟・救命救急病棟・ICU)に勤務する看護師312名に質問紙を配布した。

【結果】看護師280名から回答を得た。7領域31項目の中で「診断機能とモニタリング機能」「急速に変化する状況における効果的な管理」「質の高いヘルスケア実践をモニターし保証する」の3領域の平均値が高い傾向を示した。

「診断機能とモニタリング機能」の領域では、項目14「患者の状態から重要な変化を検出し記録する」が平均値2.1、項目16「問題を予知する:先の見通しをたてる」が2.0であった。自由記載には、「患者の治療や現在の病状に関する看護師のカンファレンスにJNPも参加した」「病状把握については、JNPからタイムリーに情報が入り、看護方針の決定がスムーズになった」「患者の状態把握がしやすい記録で、JNPの記録から看護問題を検討できた」等があった。JNPと看護師は日々のコミュニケーション、カンファレンス、記録により積極的に情報共有を図り、患者の観察、病状変化の予測、看護問題の検討に活用していた。

「急速に変化する状況における効果的な管理」の領域では、項目19「極度の生命の危機にさらされている緊急事態における熟練した実践:問題をすばやく把握する」が1.8、項目21「医師の助けが得られるまで、患者の危機を識別し、管理する」が1.8であった。自由記載には、「急変時に適切な指示をしてくれ助かった」「急変時にJNPが傍にいて、すぐ心臓マッサージを開始し無事患者が回復した」等があり、医師が到着するまでの間の急変時対応がJNPの存在により迅速かつ的確にできた事例があった。

「質の高いヘルスケア実践をモニターし、保証する」の領域では、項目28「医師から適切で時宜を得た応答を得る」が2.1であった。自由記載には「看護師から医師に伝えづらいこと、いつ報告したらよいかタイミングがわからない時、医師と看護師の仲介役になってくれた」等があった。

次に自由回答法では、JNPと看護師の関わりについて多くの記載があった。内容が共通するものに

表1 ベナーが示す看護実践7領域31項目 文献1)より引用

領域：援助役割

- 1 癒しの関係：雰囲気づくりをして癒しへの意欲を高める。
- 2 痛みやひどい衰弱に直面した際、安楽にし、その人らしさを保つ。
- 3 存在すること：患者とともにいる。
- 4 患者が自分自身の回復の過程に参加し、コントロールすることを最大にする。
- 5 痛みの種類を見きわめ、適切な対処方法を選んで、痛みの管理やコントロールを行う。
- 6 触れることを通して安楽をもたらす、コミュニケーションを図る。
- 7 患者の家族に、情緒的なサポートと情報提供的サポートを行う。
- 8 情緒的・発達のな変化を通じて患者を導くこと：新しい選択肢を提供し、古いものを破棄すること：方向付け、指導、仲介

領域：指導／手ほどきの機能

- 9 時機：患者の学習レディネスを把握する。
- 10 ライフスタイルと結びつけて、病気や回復に関することを統合するように患者を援助する。
- 11 病気について患者が解釈していることを引き出し、理解する。
- 12 患者の状態について考えられることを提供し、治療処置の根拠を与える。
- 13 手ほどきの機能：文化的に避けている病気の局面に接近し、理解できるようにしむける。

領域：診断機能とモニタリング機能

- 14 患者の状態から重要な変化を検出し記録する。
- 15 早期に警告信号を提示する：明白に診断が確定される前に、衰弱や悪化を予知する。
- 16 問題を予知する：先の見通しをたてる
- 17 病気に関する個別の要求や経験を理解する：患者のケアニーズを予知する。
- 18 よりよい健康状態を取り戻し、いろいろな治療法に対処していくために、患者の秘めた力を査定する。

領域：急速に変化する状況における効果的な管理

- 19 極度の生命の危機にさらされている緊急事態における熟練した実践：問題をすばやく把握する。
- 20 不測の事態の管理：緊急事態での必要と資源をすばやく、うまく組み合わせる。
- 21 医師の助けが得られるまで、患者の危機を識別し、管理する。

領域：治療的介入と療法を施行し、モニターする

- 22 リスクと合併症を最小限にして、経静脈的治療を開始し、持続させる。
- 23 与薬を正確かつ安全に行う：副作用、反応、治療効果、毒性および禁忌などについてモニターする。
- 24 安静による害を最小にするための努力をする：皮膚の損傷を予防し対処する。患者の離床と運動を促し可動範囲を拡張、リハビリテーションを推進する。呼吸器系の合併症を防ぐ。
- 25 治療を促し、安楽と、適切なドレナージ（排液法）をもたらす創傷管理法を創造する。

領域：質の高いヘルスケア実践をモニターし、保証する

- 26 安全な医療、看護ケアを保証するためのバックアップシステムを提供する。
- 27 医師の指示から何を省き、何を加えると安全になるかを査定する。
- 28 医師から適切で時宜を得た応答を得る。

領域：組織化の能力と仕事役割能力

- 29 多様な患者のニーズや要求を調整し、順序づけ、それに応える：優先度の設定
- 30 適切な治療を提供するためのヘルスチームの編成と維持
- 31 スタッフ不足および高い退職率への対処：不測の事態に備えた計画づくり

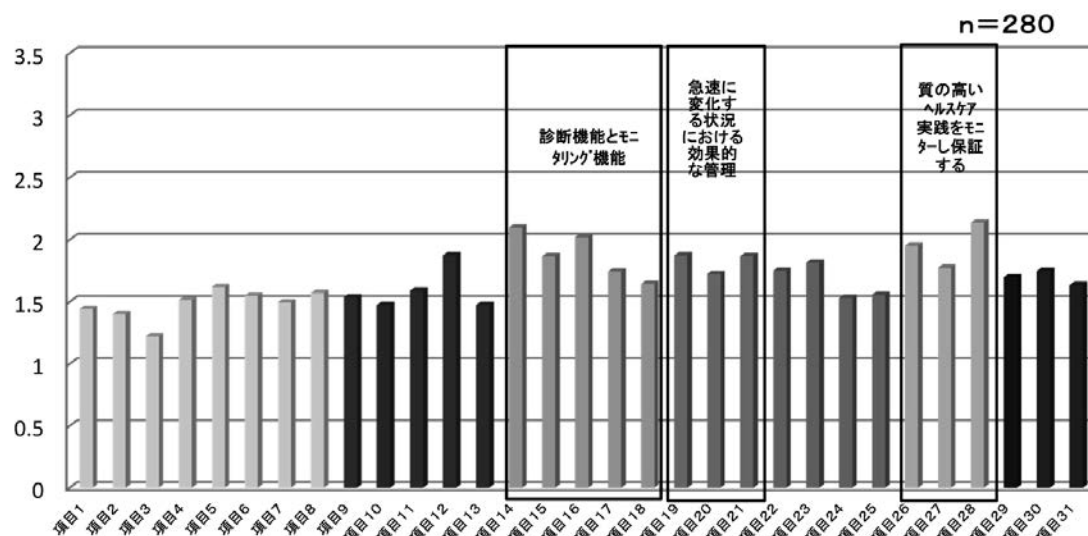


図1 JNP と看護師が連携・協働することによる看護ケアへの効果（平均値）

表2 自由記載内容の分類

タイムリーな対応

- ・急変時に JNP が傍にいて、すぐ心臓マッサージを開始し、患者が無事回復した
- ・医師がいなくても創傷処置・A ライン挿入がタイムリーにできた

情報共有

- ・JNP は看護師のカンファレンスと一緒に参加した
- ・JNP は受け持っている患者の現在の状態・治療方針について説明してくれた
- ・JNP の記録は患者の状態が把握しやすい記録で役だった

患者への説明

- ・看護師だけで説明するより患者に安心感を与えた
- ・JNP の患者への病状説明はわかりやすく、患者の立場になり説明していた

協働してのケア

- ・JNP はせん妄になった患者に対し、患者の意見をゆっくり聞き、看護師の意見も取り入れて患者がよりよく過ごせるようにした
- ・JNP は術後の離床・内服についてコンプライアンスに問題がある患者に対し、医師・看護師間の仲介役を果たしてくれた

相談

- ・医師に相談すべきか悩むことを JNP に相談できた
- ・患者の疾患・手術・治療・処置について JNP に聞きやすかった
- ・患者の状態や治療方針の確認、看護について JNP に相談しやすかった

指導・教育

- ・JNP に看護師からの視点、医師からの視点の両方を教えてもらえるので勉強になった

その他

- ・医師との連携がスムーズになった
- ・JNP は看護の視点、医師の視点の両方を持って患者の話を聞いているので、患者の知りたい情報を迅速に提供できた
- ・JNP は客観的に看護を評価し伝えてくれた

分類すると「タイムリーな対応」「情報共有」「患者への説明」「協働してのケア」「相談」「指導・教育」の6つのカテゴリーとその他に分類できた (表2)。

ま と め

今回の調査結果から、JNP と看護師が連携・協働することによる効果としては、以下の4点が考えられる。

1. JNP が医師の包括的指示のもとで活動することにより、タイムリーに患者に対応できる。また、医師不在時の急変時対応は、より迅速にそして的確なものになる。
2. 日々のコミュニケーション、カンファレンス、記録により JNP と看護師は積極的に情報共有を図っている。看護師はクリティカルな患者の病状について、タイムリーに情報を得て、観察、病状変化の予測、看護問題の検討に活かせる。
3. 看護師は患者の病状変化に応じて、必要時医師に報告し、適切な指示を得ることが求められる。クリティカルな状況にある患者について、JNP が仲介となりタイムリーに医師からの応答が得られる。

4. JNP は診療と看護両面の視点を持つスペシャリストとして、相談・教育の役割を担い、それは看護師の育成につながる。

以上のことから JNP と看護師が連携・協働することにより、医療・看護の質の向上につながる事が十分期待できる。そして、これらの成果を情報発信していくことが看護部門としてできる大きな支援でもある。

〈本論文は第66回国立病院総合医学会シンポジウム「診療看護師 (JNP) の現状と課題-JNP 活動により、国立病院機構の医療はどのように変わるか-」において「看護部門としてのメリット・支援など将来を見据えての提言」として発表した内容に加筆したものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

【文献】

- 1) Benner, Patricia E (井部俊子, 井村真澄ほか訳). ベナー看護論 達人ナースの卓越性とパワー. 東京：医学書院；1992： p 34-115.